

ガランとした教室に机も腰掛けも無く、あぐらをかいて足の痛みに耐えながら授業を受けている姿を見ると、一日も早い独立校舎をと念願し、意欲はおう盛りなり疲れも吹き飛んでしまった。

昭和二十四年四月、曾我校長の栄転に伴って校長を引き継いだ。どこの学校でも民主主義教育は手探りの時代、日教組活動が激化し各地で問題が起き、その対策も校長の重要な仕事だった。

待望していた校庭も、生徒やPTAの皆さんの勤労奉仕によって、ようやく整地され校舎も立派に完成した。二十九年に掛川市立西中学校に校長として移るまで基礎固めに努力をした。

あの生死を分け、苦難に満ちた満州、旅順、大連の避難生活を経て、今日まで終始教職の道で大過なく過ごし得たことに感謝する毎日である。

## 私の引揚げにまつわる苦労談

神奈川県 境 亨

戦前戦中の旅順市での安寧な生活

私と関東州旅順市とのかわり合いは、昭和六年二月に同市新市街大迫町の自宅で誕生したのに始まり、敗戦の翌月の二十年九月までの十四年七カ月間だった。敗戦後、早々にして進駐して来たソ連軍の厳命により、我々一家が故郷・旅順市の自宅と無念の決別を余儀なくされたのは、私が旅順中学校の三年生に在学中のことだった。新市街の一軒家のこの自宅は、両親や兄や姉たちにとっては、私よりはるかに長い実生活の苦楽の歴史を刻んだ掛け替えないものだったことは言うまでもない。

顧みれば、私の父次郎は明治四十三年ごろに、妻芳子（私の母）と幼子二人（長男正久と長女久子）を福岡県三潞郡大堯村の祖父母（信太郎とクラ）のもとに

残し、心機一転、三十二歳の壮年期に期するところあって新天地である満州大陸の南端の旅順へ勇躍渡航した。

二年後の明治四十五年四月、祖父の死を契機として、祖母・母・長男・長女を旅順に呼び寄せた。日露戦争の硝煙消えやらぬこの地での当初数年間の苦勞は、筆舌に尽くし難いものであったろうことは想像に難くないが、末っ子の私が物心ついた昭和十年ごろには、父の事業はすっかり軌道に乗っており、私は裕福な家庭環境のなかで、何不自由なく幼児期・少年期を過ごしていた。

私が誕生する以前の大正末期から昭和初期にかけて、母はこの自宅でこじんまりとした文房具兼釣具店を独力で営んでいたそうだ。この店は旅中・高学堂・師範学童に挟まれて地の利を得ていた。清朝時代には、この新市街界限は太陽溝と呼称されていたことにちなんで、店の屋号を太陽舎と称していた。最近のことと、旅順第二小学校（後に旅順附属国民学校と改称）の現同窓会会長の小山篤氏との歓談のなかで、彼はた

またま懐かしい太陽舎の話題に触れた。私は葉隠武士の娘だった亡き母の武家の商法が、いかなるものだったかとしばし想像を巡らせてみた。私が物心付いたころには、この店舗はすでに畳んでおり、自宅は住居専用に改築されていた。鉛筆・ノート・釣具など若干の売れ残り商品が押し入れの天袋に残っていたのを記憶している。商権は、同じ隣組の文具専門店マスマ（前身は華信洋行だった）に引き継がれていた。このマスマは幼友達で一級上の中西万平君の父親が経営に当たっており、旅中などの指定店として戦前戦中を通して堅実な経営を続けていた。

当時私の父は、関東軍の物資輸送を主務とする丸運という運輸会社の経営主だった。戦時中のこと、この丸運は、大連市に本社をもつ同業の国際運輸と合併してその旅順支店となったが、父は引き続きこの新会社でも共同経営者として事業に携わっていた。その傍ら、劇場兼映画館の昭和園と映画専門館の旅順映画館をも経営していた。几帳面な父は毎日欠かさずに愛用の万年筆で日記をつけ、手紙もこまめにしたためてい

た。小説を読んだり、流行歌や洋楽を聴くことには、とんと関心がなく、映画と浪花節（特に酒井雲をひいきにしていた）だけが趣味だった。幼いころ、私は父の部屋でポータブル蓄音機のそばに座らされ、ゼンマイ巻きの作業をしょっちゅう仰せつかっていた。「門前の小僧何とやら」で幼い私は、いつからとはなしに浪花節の一節を覚え親しむようになっていた。一方、經理屋の父のサイドビジネスは株式取引だった。経済誌『実業の日本』を毎月購読して、そこから得た情報をもとにして、今で言えば億単位もの資金を投じて手広く株式取引をしていた。また、信仰心があつく、身の故人の祥月命日には、必ず法要を欠かさなかった。そのような日は正午ごろ、母は末っ子の私を伴って旧市街の朝日町一丁目にあった東本願寺に向いて、そこで父と落ち合った。法要が済むと父が経営している映画館に立ち寄り、封切り映画をみて帰るのが習慣になっていた。

さらに私は幼児のころより、毎朝自宅の神棚に手を合わせて拝礼するのを習慣付けられていた。戦前のこ

と、父は豪華な仏壇をわざわざ内地の仏具屋に特注して取り寄せた。それは仏間の天井に届くほどの巨大なもので、今の価格ではゆうに一千万円近くはするであろう逸品だった。それ以来、真鍮製の仏具付属品を研磨する仕事は、私の担当となった。お盆には、母は仏間に淡い花模様の提灯をいくつも飾った。父のこうした敬虔な信心深さは孝久兄が受け継ぎ、株式投資と筆まめなところは私が受け継いだようだ。

父は毎朝九時ごろに新市街の自宅から旧市街の事業所へ満電バスに乗って通っていた。当時これらの事業すべてが安定期に入っていた。

大東亜戦争の末期とはいえども、我々一家が長年住み慣れた外地・旅順市では、内地本土のように米軍爆撃機ボーイングによる熾烈な空襲の洗礼は一度も受けたことがなく、市民生活は至って安泰だった。

思えば、十九年九月二十八日の正午ごろ、空襲警報のサイレンが、中学校の構内にけたたましく鳴り響いた。私たちは素早く防空壕にもぐり込み、恐る恐る上空を見上げた。二、三機からなる米軍爆撃機ボーイン

グの編隊が紺べきのわが領空を九千キロメートルの高度を保って悠々と白い飛行機雲をたなびかせながら、大連方向に北上する姿が視野に入った。この高度ではいかんせん、わが軍の戦闘機も、高射砲も、応戦不能だった。我々は、この白い飛行機雲がジェットエンジン特有の噴射煙であるとはつゆ知らず、エンジントラブルによる排煙と早合点して、あいつらは間もなく墜落の運命にあるぞとほくそ笑んでいた。幸い大連埠頭における空爆の被害は僅少だったようだ。私が旅順においてボーイングを見たのはこの時が初めて最後だった。

敗戦で満州全域は混乱の極に

昭和二十年八月九日、ソ連は我が国との不可侵条約を一方的に反古にして、大量の軍隊をもって、怒涛の如き勢いでソ満国境を幾つもの地点から乗り越えて、満州国の全域に侵攻してきた。

そのころわが国は、米国ら連合国との三年九カ月にわたる大東亜戦争の終末期を迎えていた。南方前線基地は次々に敵方に奪還され、ついに沖縄陥落そして広

島への原爆投下と続き、今やわが国の敗戦は決定的となっていた。そのため満州での関東軍の国境防衛隊は、全く手薄な状態になっており、戦おうにも飛行機や戦車などはなく、将兵たちはとうに戦意を喪失していた。各部隊長の判断で、ソ連軍が侵攻してくる前に部隊は解散され、地元からの応召兵には帰還命令が出された。私の泰久・徳久・孝久の三人の兄たちもその例外ではなく、やつれ果てた敗残兵として、着の身着のまま命からがら旅順や大連に逃げ帰ってきた。

かくして、ソ連軍は、わが関東軍を苦もなくけ散らし、電光石火の素早さで満州全域をその勢力圏に収めながら雲霞のごとく南下してきた。

満州各地に残留していた将兵たちは、戦火を交えることもなく、一斉に武装解除され、丸腰にされて屈辱の捕虜収容生活を送る羽目になった。やがて、彼らは家畜同然の扱いで大挙して貨車に積み込まれ、シベリア内陸部の極寒地での強制労働のために抑留されていた。その結果、幾十万という貴い人命が、飢えと寒さと労働の過酷さに耐えかねて、祖国への帰国を夢見

ながら、無念にも現地で露と消えていった。聞くも涙、語るも涙の一大悲劇だった。

満州全域に取り残された日本人の留守家族の悲惨さはさらに深刻だった。父親や兄たちは召集されたまま、頼りの関東軍の後ろ盾も失い、か弱い妻子たちだけで、着の身着のままですし詰め列車を乗り継いで、南方へと逃げ延びて行った。その逃避行の途中において、同伴の幼子たちは、栄養失調や伝染病で命を失ったり、満人に引き取られたりした。まさに地獄絵そのものだった。こうして現地で辛うじて生き延びた人たちが中国残留孤児なのである。

私の妻洋子（旧姓岩館）の一家も敗戦時には北満の要衝都市・牡丹江市で平穏な生活を営んでいた。長女だった私の妻は、敗戦時には牡丹江高等女学校の一年生に在学中だった。義父幸吉は、特高（特別高等警察）勤務だったため、敗戦後間もなく、満人の密告によってソ連兵士に致されてしまった。それ以来、頼りの夫とは生き別れになった義母安枝と五人の子供たち（洋子・幸樹・英子・美智子・武範）は、貨車を乗

り継いで広大な満州の荒野をさまよい、到底筆舌には尽くし難いほどの苦難の逃避行を何日も続けた。途中で乳飲み子の弟武範と三歳の妹美智子は、疲労と栄養失調のため相次いで命を落とした。彼らの遺骸を現地の手近な所に埋めた。そうすることが残った家族でできる精いっぱい供養だった。ようやくにして渤海の遼東湾に面する壺蘆島にたどり着いた。そこから引揚船に乗って博多港に上陸して、北海道函館郊外の郷里にたどり着き、粗末な引揚者住宅に母子四人はひとまず落ち着いた。二人の幼児を亡くした義母の無念さは察するに余りある。

一方、義父はなんと十三年間におよぶシベリア内陸部の極寒地での強制労働に耐え抜いて、三十三年にやつ果てた姿で祖国に復員し、北海道の郷里で妻子らと涙の再会を果たした。義父は、復員後に自宅を新築して、今年九十歳を超えた高齢だが、義母および英子と共に楽しい余生を送っている。

敗戦ショックが旅順市にも波及

昭和二十年八月十五日の終戦詔勅の渙発によって、

わが国の敗戦は決まった。ここにおいて、外地の旅順市に住む私たち同胞を取り巻く環境は一変した。まさに奈落の底にけ落とされた思いだった。日本人市民は職場を失い、日々の生活にも困窮するようになった。

何よりもつらかったことは、外地ならではの他国民から被る精神的な屈辱感、母国の庇護を失った不安感をなめさせられたことだった。過去四十年にわたって植民地支配者として君臨してきた日本人と、従順な僕としてあごで使われてきた満人との立場が、敗戦を契機としてまるっきり逆転した。彼らは手のひらを返したように豹変し、我々に対してことあるごとに高圧的な態度をとるようになった。

街中では人民裁判と称して、一人の日本人男性を大勢の満人たちが取り囲んで、戦時中の彼の行動を異口同音に口汚く誹謗して集団報復の暴行を加えていた。我々は無念にも彼を助けることもできず、自分がかかわり合いになるのを恐れて足早にそこを立ち去るしかなかった。彼らは日本人の一般通行人に対しても、隙あらば難癖をつけて、大勢寄ってたかつて危害を加え

てやろうとひそかに手ぐすね引いていた。我々は、彼らの常とう手段の挑発に引き込まれないように、自重して行動するようにしていた。

この年、父親は既に六十六歳に達しており、もはややり直しがきかない年齢だった。痛恨失意の父親の胸中は、少年の私にもはっきりと読み取れた。その心痛の深刻度は、官舎や社宅住まいのサラリーマンの比ではなかった。

私がラジオ放送で終戦の詔勅を拝聴したのは、旅順中学校三年生の動員先の大連市郊外甘井子の進和鉄工所の工場内だった。

ラジオから流れる玉音は、電波の乱れでとぎれとぎれの聞き取り難いものだったが、昭和天皇は、涙声ながらに全国民に対して真しに戦争終結を呼び掛けられた。ラジオの前で直立不動で拝聴していた全員は、一斉に手放しで号泣した。我々は動員先から即刻旅順に戻った。自宅では父親が、最悪の事態を予期し、いち早く貯金や株券をすべて現金化していた。強盗の襲来に備えて、家族全員で大量の札束を自宅のあちこちに

分散して隠した。仏壇の奥や、畳の下や、火の無い火鉢の灰の中など。こんなに高額の札束を無造作に扱ったのは少年の私にとっては全くの初体験だった。

すぐ上の兄孝久は、戦争末期の八月初旬に学業半ばで関東軍に召集され、満州中央部の四平省西安市の部隊に配属されていた。この部隊は敗戦直前に解散して、兄は列車を乗り継いで疲労困ぱいしてようやく旅順の自宅に転がり込んできた。彼は逃走中に口にした不衛生な食物や飲み水が原因で、大腸カタルにかかっており、急ぎよ鎮遠町の成田病院に入院した。

敗戦直後の旅順市内の治安は、乱れ放題の最悪の事態だった。自宅から徒歩で二十分ほどの病院への毎日の弁当運びは、私の役目となった。途中の中村町のヤマトホテル前の空掘りには、内臓が飛び出した軍馬らしき、無残な解体前の死骸が転がっており、混乱の極みに達した街の実態を如実に露呈していた。彼は幸いにして大事に至らず、ほどなく退院したが、しばらくは本調子ではなかった。

八月二十二日夜には、満州の遼東半島（当時の関東

州）の最南端に位置する我々の旅順市にも、ソ連兵士の一隊が、物々しい装甲車を先頭に続々と進駐してきた。ほどなくして、これらソ連兵士による家宅侵入・金品略奪・婦女凌辱などの無法な蛮行が頻発して、旅順の日本人市民は不安におののいた。赤鬼然とした面構えで、毛深く、巨漢の彼らを我々日本人は露助と呼び、満人たちはターピーズ（鼻がでかいやつ）と呼んで内心蔑視していた。

彼らは「ダワイ、ダワイ」とほえながら、畳敷きの部屋を容赦なく土足で蹂躪した。時計、万年筆、貴金屬類の略奪もやりたい放題で、腰のベルトに略奪した腕時計を十個以上もぶら下げて、悦に入っていた。時計のネジの巻き方も知らない無知文盲なやからは、ネジが切れて針が止まるとそれをポイと無造作に路上に捨てた。最初に進駐して来たソ連兵士たちは、それまで牢獄につながっていた極悪非道な囚人連中だったそうである。彼らにとっては、占領地での略奪行為などは朝飯前で、罪悪感などみじんも持ち合わせていなかった。

下級兵士たちは、靴下代わりに赤い布で足をくるんで軍靴を履いていた。彼らが襲来するたびに、母と姉は、素早く庭の防空壕に身を隠した。当然のことながら、年ごろの婦女子は街中へは一歩も外出できなくなつた。

こういう暴挙に加えて、夜間の街では中国人同士の間府軍と八路军とが撃ち合う銃声が遠くでこだまして、不気味さを倍加させていた。

#### 旅順新市街の自宅との涙の決別

こういつた混乱のなか九月中旬には、ソ連軍当局は「新市街に住む特殊技術者以外の日本人は全員即刻旧市街へ移住せよ」との追放命令を発した。この厳命によつて、我々は長年住み慣れた自宅との慌ただしい決別を余儀なくされた。父親は、自社所属の苦力クワリ（満人の荷役労働者）たちの元締め役として、信頼できる苦力頭を股肱の配下として手なずけていた。彼は父のことを「ジャングイ、ジャングイ（親分、親分）」と呼んでなついていた。年末には正月料理用にキジやウズラなどを届けてくれた。父親はその彼に、わが家

屋と家財の一式を無償で譲渡することにした。父親はソ連軍の命令に従つて、記念の写真類を中庭ですべて焼却した。今となつては惜しまれ諦めきれない。

いよいよ自宅を明け渡す日がやつてきた。長年住み慣れた自宅を離れるに当たり、全員は悲痛の涙を止めどもなく流した。我々は敗戦国民の悲哀と無念を、骨の髄までなめさせられた。この瞬間が自宅との永遠の決別となつた。

やがて苦力頭が調達してくれた荷馬車に、寝具や衣類など最小限にまとめた荷物を積み込み、家族全員と旅順工大生の堤良司氏の六人が乗り込んで、我が家を後にした。まさに後ろ髪を引かれる思いだった。孝久兄はいまだ病み上がりだし、私は若年過ぎて心もとないと感じた父は、堤氏を一家の用心棒として同行させた。彼は佐世保の出身で、工大への入学に当たり父が身元保証人になつていた。用心棒としては適格者だったし、彼にとつても都合良かった。

私は将来とも、恐らくかの地へ往訪することはあるまい。変ぼうした現実の街に接して、幻滅感に打ちの



めされるのが怖いからである。つい先日のこと、旅順・大連方面を往訪した幼なじみの武石セツ子（旧姓二宮）さんが、わざわざ私の自宅周辺の現状を、つぶさに写真に撮って送ってくれた。それによると、懐かしい自宅の建物は跡形もなく喪失していた。我が家を取り巻いていたうっそうたる槐えいじゆの巨樹もすべて伐採し尽くされているようだった。自宅があつた敷地跡には、薄汚いれんが造りの二階建てのアパートが建っており、自宅前の公学堂から師範学堂（ともに満人専門校）、そしてヤマトホテルへ通ずる歩道の右側一帯には、衣類などを売る多数の屋台が連なり、雑然とした不潔な町並みに変貌していた。戦前・戦中の清麗な町並みの様子がいつまでも思い出として脳裏に残っている私は、ただぼう然自失するばかりだった。無念の思いが我が胸中に込み上げてくるのをどうしようもなかった。

#### 旅順旧市街の知人宅での同居生活

我々一家を乗せた荷馬車は、旧市街の第一小学校の近傍の永見外雄氏がお住まいのアパートにたどり着い

た。永見氏は北海道旭川市のご出身で、国際運輸の旅順支店長として父との共同経営に携わっておられた。彼の温かいご好意に甘えて、わが一家は当面彼の家族と同居させてもらうことになった。

永見氏ご夫婦は四十五歳前後であつたらうか、世話好きで親切な方だった。彼のご家族は、ご夫妻と娘さん二人の四人、そこに我々六人が加わって、都合十人が一つ屋根の下に起居を共にすることになった。永見氏のアパートはそれほど広くはなかつたので、私たちが一家の突然の同居によって、同家はまさにすし詰めの状態になった。大変なご迷惑を掛けたものである。永見家の朝と昼の食事は、自家製の豆乳と粟の混じつたおかゆのことが多かった。年寄りの両親のもとで育てた末っ子の私は、口がおごっており、このどちらも苦手なメニューだった。好意に感謝しつつ、息を止めて一気に飲み干した。夕食も大豆入りの御飯といった、至って質素なものだった。

永見家の二人の娘さんは、私とほぼ同年輩で、口数の少ないしとやかな乙女たちだった。私は同じ屋根の

下に住んでいながら、同居期間が短かったせいもあつたろうが、お互いが思春期だったため、恥じらい遠慮し合つて親しくなるには至らなかつた。豆乳作りの折には、私と彼女たちは、ひざを交えながら交替で石うすを回したこともあつた。自宅を喪失したばかりの傷心の私には、彼女たちへ淡い恋心を抱く余裕などはない。この自宅はアパートの二階だったので、ベランダには地上まで届く緊急避難用ロープが常時備えてあつた。私は面白半分はこのロープを使って昇降を繰り返して遊んでいた。

ある日のこと、第一小学校講堂に緊急集合せよとの連絡があり、先生から三年在学証明書を交付された。この書類は後日の大連一中への転校の折に役立つ。そうこうしているうちに、ついに旅順市を離れねばならない事態が到来した。ソ連軍当局は、かの日露戦争の敗戦で怨念深い旅順の地を、再び軍事要塞化する意図の下に、「技術者と医者以外の日本人は全員隣接の大連市に十月十日までに移住せよ」との敕命を發したからである。かくして、永見宅での同居生活は、わ

ずか一カ月はどで終止符を打った。それ以来、永見氏のご家族とは、大連でも内地に引き揚げてからも再会していない。娘さんたちのお名前もとうに失念してしまつたが、きつと良いご家庭を築いておられることだろう。

極度の愛煙家で高齢だった私の父は、持病の狭心症をこじらせていた。心配事などが原因でストレスが高じると、必ず心臓の激痛を訴えた。その度ごとに、母親は父親の胸に蒸しタオルをあてがひ、その上からさすって介抱に努めていた。その応急手当によって当座の発作はなんとか治まっていた。敗戦という不測の異常事態によつて、長年粒々辛苦の末によくやくにして軌道に乗せた事業はもちろんのこと、自宅や家財までの一切を、突如として喪失してしまつた父親のストレスは、我々には癒す術もなく、その病状は日増しに悪化の一途をたどつていった。

父親の生涯における資産形成の面での唯一の失策は、不動産を内地にも分散投資していなかつたことである。しかも、成人した息子たちをすべて外地に勤務

させていたこともあって、親族はすべて引揚者となり、赤貧洗うがごとき生活苦を強いられる結果となった。

大連市へ強制移住命令下る

父親の病状を気遣いつつ、かつ前途の生活にも不安を抱きながら、両親と敏子姉と私の四人は、旅順駅から汽車で大連へと向かった。四人の視線は皆うつろで、車窓から過ぎ行く懐かしい沿線の風景などは、ほとんど目には入らなかった。お互いに放心状態で会話すらなく、双眸からは涙を止めどもなく流していた。

一方、孝久兄と堤氏は、満人の御者付きの荷馬車に荷物と一緒に同乗して、約四十キロメートルの旅大バス道路（南路）を大連へと急いでいた。旅順における一家の動静を案じた大連在住の徳久兄も、同日、空の荷馬車を仕立てて同じ道路を旅順へと向かっていた。両者は途中ですれ違ったはずだが、お互いに気付かなかったようだ。恐らくは、当日の旅大バス道路には、大連へ向かう荷馬車の列が、あたかもジブシーの集団移動のように数珠つなぎになっていたのであろう。

幸いなことに、両者とも途中で満人の暴徒たちの追いはぎに襲われることもなく、夕刻には全員無事に、大連駅近くの泰久兄のアパートで合流できた。一同は胸をなで下ろしたものの、父親だけはすっかり憔悴していた。

大連市での苦勞の生活

夫婦だけの泰久兄のアパートは、一間限りだったので、とても長居は無理だった。翌日、我々一家は、長姉久子の嫁ぎ先の古賀宅（長生街にあった満州化学の社宅・薫風荘）へ移った。四階建ての最新式の鉄筋アパートで、エレベーターこそなかったが、水洗トイレや内風呂なども完備しており、現在のマンションにも匹敵するものだった。長生街界限は日本人と満人との住宅が混在していた。略奪目当てに襲来する満人やソ連兵士の防御のために、薫風荘の一階入口には急場造りの頑丈な物々しい木戸が取り付けてあった。

久子姉夫婦には四人の子供があり、我々六人が同居するにはここも手狭だった。そこで私と堤氏は、薫風荘から徒歩で三、四十分離れた錦町の山浦二郎宅に厄

介になることにした。山浦氏は、大連婦人病院の事務長だった方で、れんが造りの平屋二戸縦割りの結構広い官舎に住んでいた。棟続きの隣は麻雀仲間の永友医師宅で、ご夫人は旅順第二小学校の先輩の設案（旧姓）寿子さんだった。ソ連兵の不意の襲来に備えて、押入れ奥の隔壁をくり抜き、双方が避難し合えるようにした。この界限は日本人専用地区だった。徳久兄は戦時中から山浦宅に寄宿して、大連砂糖組合に勤務していた。山浦夫妻と兄とは旅順民政署時代からの旧知の仲だった。ある日、徳久兄は私を伴って、砂糖組合の勝手知ったる倉庫から、得難い砂糖をリュックサックに満載してあえぎながら持ち帰った。

それから数日後の十月二十八日、父親は古賀宅で危篤に陥った。敗戦直後における大連市内の治安は極端に悪かった。深夜、山浦宅に電話で父親の異変を知らせてきたものの、タクシーはないし、まして真夜中の徒歩の行動は、満人やソ連兵の追いはぎの餌食になる危険があつてとても無理だった。我々はまんじりともせずにその夜を明かし、翌朝早々に古賀宅へ急行し

た。しかし、父親はすでに息を引き取った後だった。死因は狭心症が高じた心筋梗塞だった。長年かけて営々と築いてきた地位や資産のすべてを、一挙に喪失した父の無念の胸中は察するに余りあった。あと二カ月で満六十七歳という寿命だった。

当時、火葬場はかろうじて操業していたが、霊柩車は一切運行していなかった。やむなく大八車に棺を載せて、われわれ兄弟と社宅の男衆だけで、一山越えた郊外の火葬場まで運んだ。我々は、このうら寂しい山道の途次に、満人の追いはぎに襲われはしないかと恐れおののいていたが、幸いにも無事にことは運んだ。

やがて、私は、博文町の大連第一中学校の三年生に編入が許可され、錦町の山浦宅から通学することになった。山浦宅から一中までは徒歩でほんの十分足らずの至近距離だった。同校には旅中時代からの同級の編入生が十人ほどいたので心強かった。学業は曲がりなりに引揚げ直前まで続けることができた。

ロシア語の初歩会話の授業もあった。校名は大連日僑第一中学校と変更させられ、やがて午前一中、午後

二中の二部授業となった。

徳久兄は、母親からの資金援助で、旅中時代の親友安藤満義氏と共同で、冬には山浦宅の門前に四斗樽を並べて漬物屋を、夏には中庭に屋台をこしらえて、ところどころかき氷屋を営んでいたが、大量の落花生の仕入れで粗悪品をつかまされて大損をした。そのうちソ連のG P U（軍事警察）が嚴重に市内を監視するようになって、街の治安は急速に平常に復した。このころ、旅順の新市街以来ずっと用心棒として行動を共にしてきた堤氏が、工大の仲間と共同生活を営むことになって我々のもとを去った。

大連市随一の繁華街・浪速町の喜久屋デパート沿いの舗道一带に、日本人たちが立ち売りの露店を開き、ソ連兵相手に晴れ着などを売りさばいているといううわさを耳にした。私たちは別段生活に窮してはいなかったが、引揚げ時には着物類全部は持ち帰れないこともあって、物は試しにやってみようと、母親を誘って敏子姉の訪問着を持参して露店に立ってみた。露店商ならではの売り買いの微妙な駆け引きには、意外な緊

迫感を伴い貴重な初体験だった。手にした現金は軍票だったが、朝鮮銀行券と同様に一般に流通していた。

一方、長生街に近い大連運動場は、満人たちの店舗が軒を連ねた闇市と化し、活気を帯びていた。白米やメリケン粉などのあらゆる穀類が、高値ながらすすべてそろっていた。幸運にもわれわれ一家は、父親が残してくれた潤沢な現金のお陰で働かなくて済んだ。市場では天津包子・ピンズ（トウモロコシの粉のパン）・乾燥サツマイモの粉の饅頭・落花生の絞り粕などを買っては食べていた。

やがて二十二年一月末、我々一家にも待望の引揚げの順番が巡ってきた。携帯荷物は、一世帯に布団包み一個と一人にリュックサック一個と制限されたので、着れる限りの重ね着をした。持ち帰る現金は、祖国での当座の生活費として一人千円に限定された。余分な現金の処分については記憶にない。

当日は粉雪が舞う寒い日だった。近隣の下藤小学校の校庭に一たん集結したのち、トラックの荷台にすし詰め状態で大連埠頭まで運ばれた。

埠頭では、こともあろうに暖房もない倉庫内で、家族がうずくまっていたの徹夜の野宿だった。冬場の海岸からの深夜の寒気は、骨の髄まで凍りつくようだった。特に老人や幼児には酷だった。翌日になってようやく引揚船への乗船が許可された。

#### 引揚船内の出来事

引揚船に乗り込んだ瞬間、我々はひとしく安堵の胸をなで下ろした。船内は日本人ばかりだったからである。ソ連兵や満人たちは、埠頭岸壁のかなただった。敗戦後の屈辱感・恐怖感・緊張感からやっと解放され、やれやれという安堵の喜びが胸中に込み上げるのを覚えた。寒風が吹き荒れる甲板に立って、思い出の大連の町並みが、次第に遠ざかりかすんでゆくさまを、飽きずに眺めていた。満州もこれが生涯の見納めになるのかと思うと、涙が頬を伝った。やがて船は黄海洋上に出て、周囲には何も見えなくなった。やむなく貨物船の船倉に下り、むしろの上ですし詰め状態の母親のもとに戻った。退屈さのあまりしばしまどろんでいた。夕食後、こんな我々の無聊を慰めようと、船

員さんたちがギターの伴奏で「かえり船」などの流行歌を歌ってくれた。彼らの親切が身にしみて嬉しかった。この「かえり船」は復員兵士の引揚船を迎える歌として、二十一年十月に田端義夫の吹き込みで発売された大ヒット中の歌で、我々の境遇にもまさにぴったりのものだった。

ある時、乳飲み子が船内で息を引き取った。重りを付けた袋になきがらを詰めての水葬は、実に痛ましかった。祖国上陸を目前にしながら、いとしい子を船内で失った家族の無念さはいかばかりか。

三日ほどして対馬や平戸などの島影が視野に入ってきた。「ああ祖国だ！」と、私は思わず大声で叫んだ。まさに感激の一瞬だった。

#### 祖国へ引揚げ後の生活苦

二月の初め、我々一家が夢にまで見た祖国へ第一歩をしるすときがきた。

佐世保郊外の南風浦はまのうらというひなびた港だった。上陸に際して検疫所でDDT（ノミ・シラミ駆除用殺虫剤）の白い粉をふんだんに頭から振り掛けられた後、

木造二階建ての海兵隊宿舍跡の収容所に一たん落ち着いた。幸いにも、佐世保市内在住の叔母の佐治栄さんと電話連絡が取れ、叔母は年頃の娘の満智子さんと同道して、即刻駆けつけてくれた。母親と叔母とは、三十六年ぶりの姉妹の感激の対面だった。兩人とも涙、涙で抱き合った。我々は、叔母さんが持参してくれた白米のおにぎりをむさぼるようにほお張り舌鼓を打った。この時の銀シャリの味は今でも記憶に鮮明である。

数日後の早暁、我々は収容所を後にして南風崎駅に向かった。男衆は徒歩での山越え、婦女子はトラックの荷台に乗せられて運ばれた。駅でそれぞれの家族が合流して汽車に乗った。我々一行は、佐賀県鳥栖駅で下車、三養基郡麓村の義兄の叔父で、豪農の内田虎雄宅に一たん落ち着いた。間もなく、久子姉の二歳になる末っ子が、長旅の疲労から肺炎をこじらせ落命した。幼児だったので土葬にした。義兄夫婦の落胆を我々は慰めようがなかった。

数日を経て、我々境家一行は、ここで古賀一家に別

れを告げて、福岡県三潞郡の祖父の屋敷へ向かった。荒れた屋敷には、先に北京から長兄の正久一家が引き揚げていた。手元にはそれほどの現金の持ち合わせがない我々は、早速にも生計の手段を講ぜねばならなかった。当時は電力事情が悪く停電が頻発していた。当地は、たまたま木蠟の原料となる黄楨の実が特産だった。細長いブリキ缶いっぱい木蠟を溶かし込み、これに灯芯を添えたものが、「万年蠟燭」と称してすでに商品化されていた。我々はこれを大量に仕入れて、近隣の農家を一軒一軒回って小売り行商を始めた。また、長兄の友人から宮崎特産の干し椎茸を大量に送ってもらって、久留米の食料品店に卸して利ぎやを稼いだりしていた。

兄たちからの勧めもあって、私は新学期から隣の郡の八女郡羽犬塚町にある八女中学校へ復学した。しかし、行商で学業が二カ月ほど途絶えていた理由で、一年遅れの四年生への編入となった。片道五キロメートルの田舎道を、下駄履きで毎日徒歩通学した。農家出身の生徒たちが自転車ですいすい追い抜いて行くのが

しゃくにさわった。彼らの弁当は白米だったが、私のはいつも手製のまずいパンや蒸し芋だった。仙貨紙に印刷した教科書も、編入者用の余分はなく、友人から借りて写し取った。遊ぶにも小遣いはなく、勉強以外にすることはなかった。必然的に成績は顕著に向上していった。たまに街に出て映画をみるのが唯一の楽しみだった。

近隣の柳川・大牟田・久留米などの街に出る西鉄電車の蒲池駅へは、徒歩で三十分ほどもかかった。その中間辺りにちくわを焼いている店があった。うまそうなおいを漂わせるこの店の前を通るたびに、焼きたてのちくわを腹いっぱい食べてみたいなあと思いつついつも素通りだった。

屋敷の裏庭では不断草・カボチャ・唐辛子を栽培していた。この自前の野菜を具にして、ふすま混じりの小麦粉を練った団子を入れたすいとんが常食だった。調味料は、固形醬油を塩水に溶かした即席のもの。唯一の蛋白源は、塩辛く臭みの強い鯨肉で、塩鮭は我々の口にはとても入らなかった。近海ものの生鰯の塩焼

きは、とびっきりのごちそうだった。

孝久兄が九州大学附属医専に編入した機会に、母・徳久兄・敏子姉を含めた四人は、福岡市へ転居した。湊町にあったブラック建てのマーケットに入居して、漬物やさつま揚げなどの食料品店を営んで、日々の生計をかるうじて立てていた。起居は天井の低い、自由な屋根裏部屋だった。

やがて、米国ロサンゼルス郊外のインディオ市で、広大な農園経営に成功していた日系一世の伯父と連絡が取れ、生活財の援助を受けるようになった。そこで、一家は食料品店をたたんで、地行東町にあった家の二階を借り受け転居した。このころ徳久兄は和菓子 の自家生産と卸商を本格的に始めた。

私も田舎から福岡市の母のもとに移り、進学校として名門の修猷館高校の転校試験に合格した。ついで、育英会の奨学資金を受けながら九州大学工学部応用化学科を卒業し、三十一年四月に三菱石油に就職した。ここに至って、私は敗戦後約十年間にわたる内地での貧乏暮らしにも、やっと終止符を打つことができた。



この間の苦勞は決して無駄ではなく、その後の私の人生において良き試練として大いに益するところがあつた。

### 結び

振り返って見れば、関東州の旅順市は、明治三十八年の日露戦争の勝利によって、わが国の租借地となり、昭和二十年八月には大東亜戦争の敗戦によってその主権を喪失した。旅順での植民地時代は、わずか四十年間でその歴史は閉幕したのである。その間、われわれ外地の植民地在住の同胞たちは、内地とは比較にならないほどの優雅で高級な市民生活を享受していた。ところが祖国の敗戦を契機として、その高級住宅や伝統ある学校やもろもろの施設すべてから、我々は敗戦国民としてたたき出されてしまった。

平成十年現在、かつて大家族を誇っていたわが家は、いまや両親をはじめとして長兄正久・長姉久子・次兄泰久・三兄徳久・次姉敏子たち明治、大正生まれの兄妹たちは、ことごとく他界してしまった。現在健在なのは、昭和生まれの孝久兄と私のわずかに二人だ

けである。孝久兄は、北九州で内科小児科の医院を順調に経営しており、一方、私は三十五年間のサラリーマン生活をつつがなく終えて現在はフリーである。両家庭とも子供たちはすでに独立しており、夫婦だけの悠々自適の毎日を楽しんでいる。

昭和六年二月の誕生以来、十四年半にわたって、一貫して植民地旅順市で過ごしてきた私のかの地での生活体験の実態を語り継ぐのが、自分に課せられた責務であると痛感する。かつて私自身が体験した旅順市そして大連市における苦樂の生活実態を、次世代あるいは次々世代の後継者たちへ伝承しなければ、彼らは、かつての日本の植民地だった両市が、自分たちとは全く無関係な異国の都市として一顧だにしなくなってしまうであろう。

私はこの文章を、望郷の思いを抱きつつ真摯に、できるだけ克明に書きつづってきた。日本の植民地だった平穩な時代、そして敗戦後の混乱の極に陥った時代の双方について、また、かの地に在住していた同胞たちが、実際に体験してきた生活の歴史の一端を伝承す

るのに、この文章がいささかなりとも役立ってくれば、この上ない喜びである。

## 旅順での終戦体験

神奈川県 勝江明男

関東州旅順市、私の生まれ故郷であり、二十年間の青少年時代を過ごし、ここで終戦を迎えた生涯忘れることのできない町である。

旅順は関東州の最南端に位置し、人口十四万二千人、うち日本人一万三千人、旅順港に注ぐ龍河を境に新旧両市街に分かれ、更に海軍要港部、旅順要塞司令部等の陸海軍の施設があり、市内の大部分が要塞地帯で、日本の大陸進出の拠点だった。

旅順港に面した市街地は、幅広いアカシア並木の道路網とロシア時代の赤レンガ造りの欧風建築物が数多く残っていて美しい町並みを構成し、後背地を山に囲まれ、中国東北部では最も気候温暖な地域で、周辺に

工場地帯もなく、居住地としては理想的な環境の街だった。

私は大正十五年三月、新市街明治町で生まれ育ち、住まいは市内で何回か変わったが、終戦でソ連軍に追い出されるまで旅順に住んでいた。

終戦時、我が家は五人家族で、私を除く四人は新市街大迫町に住み、私は旅順工科大学予科に在学中で新市街西端月見ヶ丘の工大興亜寮から通学していた。

両親が旅順に来たのは大正四年か五年ごろだが、どういふ事情で生後まもない長男を抱えて東京から来たのか、詳しいことはわからない。

父は、旅順中学校寄宿舎の医務室に勤務し、生徒の健康管理に当たっていた。仕事の性質上、風邪や伝染病が流行したときには長期間寄宿舎に泊まりこんで病人を看護したり、また中学の教職員や生徒以外にも、近所の人や知人の家族に病人が出ると往診したりしていた。私が小学校三年のとき、五十一歳で急逝。あとに母と五男一女が残された。当時、一家は新市街赤羽町の官舎住まい。長兄と次兄が旅順工科大学予科生、